



救える命があるならどこへでも

〔東日本大震災 派遣看護師・スタッフコーディネーター〕

石岡未和さん

(特定非営利活動法人 アムダ所属)

私は、ニュージーランド地震の支援に行つて、三月四日に帰国、休暇中でした。十一日に地震発生したので、その夜にアムダ本部(岡山県岡山市)に皆が集まりました。

翌日、私と医師と本部の調整員一名が仙台に入り、十三日午後から救援活動を始めました。高齢者施設で看護師の手伝いです。

私は十四日に一度、本部に戻り、後方支援にあたりました。そして、現地との連絡をとりながら、百四十人の医療、ボランティアのスタッフを被災地へ送り出す仕事をしました。

再び私が被災地へ入ったのは三月三十日です。伊丹空港から秋田空港へ飛び、盛岡まで二時間半の高速バス、盛岡からタクシーを乗り継いで岩手県花巻市の東和町に至りました。

担当するのは、加藤宏暉町長も津波で流され、人口の半数が安否不明となった岩手県大槌町です。東和町にロジステックの拠点を設けており、そこから二時間半の沿岸部が活動場所でした。

私は看護師ですが、今回は、全国各地から集まる医療スタッフ、ボランティアスタッフが活動しやすいように業務調整するのが仕事でした。

本部と現地の意向調整、スタッフの体調管理、東和町をベースキャンプにしてのスタッフの送り込み、迎え入れ、大槌町に直接行って報告を受け、物資の要請、各支援団体との打ち合わせと調整などです。

一番最初に救援医療に従事したのは昨年のチリ地震の時でした。初めての現場で、言葉ありませんでした。大槌町も同じです。ここが日本だというのが信じられませんでした。

医療スタッフは八時半から九時診療開始、夕方は五時まで。鍼灸が始まってからは夜九時くらいまで診療するようになりました。私は、診療が終わってから、連絡とミーティングをしますから、業務が終わるのはだいたい日付が変わってからです。な



かなか寝る時間はないのですが、それはいつものことです。それでも、今回は四、五時間の睡眠時間は確保していました。

現地張り付きのスタッフは、避難所で泊まり込み、二十四時間そこにいるわけですから厳しい状態です。食事も最初は持参したカロリーメイト、カップラーメンでしのぎました。結構、サバイバルな状況なのです。

被災地では、みなさん普通に生活しています。若い子から年寄りまでささくに話しかけてくれます。まったくいつも通り、普通です。でもずっと話していると「実は、夜寝られないんだ」という話になります。全員が家や、肉親を失っていますが、表面上ではその悔しさ、悲しさを見せないようにしています。ひとりのお爺さんが「もういつになっても家建つ心配もないし、どっしよつもないなあ。木材拾って自分で作るしかねえなあ」と呟つぶやいていたのが印象的でした。

今回の大震災は、亡くなるか、軽い怪我

かどちらかでした。医療施設が復活するまで、高血圧、糖尿病など慢性疾患が放置されて状態が悪くなるという人が多かったの
で、高齢者医療だともいわれていました。緊急医療はあまりなく、空いた時間に訪問したり、話を聞いたり、とにかく寄り添うことを心がけました。避難所の人々は、医療スタッフが聴診器や血圧計を持っているだけで「安心する」といってくれました。

とても悲惨な状況に、人間ですから気持ち
ちは動じますが、被災された方々にとつては、日常に起こったことを乗り越えようとして生活しているわけです。私も平常心
いで、その人が危機を乗り越えるお手伝いを、具体的にすることなんです。

私は同情するために来たわけではありま
せん。被災者の方も同情して欲しいなんて思っていないはず。ですから、可哀想
なんて絶対に思わないようにしています。あんまりつらいことを聞くと、やっぱり泣

その人に治療してもらいたいという人、またリピーターがすごく多いのです。辛い思いを抱えた人が来ると、その先生はマッサージから入って話を聞きます。患者さんは私たちには、決して言わない話をする。すると症状が軽くなる。皆さん、辛い思いを出して、心を開いて、泣くのです。「心までマッサージをしてくれる。心の痛みを針で治す」といわれています。大槌町の人です。

広島と岡山の、お菓子作りの職人さんや被災者の皆さんに食べてもらいたい」と申し込んできました。二千個作るということです。地元の人たちと計画して、小学校と高校の始業式に併せて、ロールケーキの炊き出しをしてくれました。甘い物は支援物資で来てたけど、生のクリーム、大きなイチゴまではさすがになかった。それらをたっぷり使い、実演して子供たちに配ってくれました。子供たちが、すごく嬉しそう



いたりすることはありますけど。

参加するスタッフは、みな志を高くしています。とにかく熱い。部屋を訪問して熱心に話を聞く。今度は、楽しい思いをしてもらうために、ドッジボール大会や歌の会を催し、子供たちが安全に遊べる場としてプレイルームを作ったり、映画上映会を開催したりと、とにかく被災者に喜んでもらうとして、「被災者の人たちも共に楽しんで、喜んで、一緒に泣いたよ」と報告が入ると「ほんとに皆さん素晴らしいな」とホロリとしました。

三月末頃から菅波代表が現地の人を採用していこうという方針を出しました。現地にお金を落としていく、それが復興支援に繋がるのだということです。

ドライバーの人、色々な作業を手伝う人を採用しました。その中に女性の鍼灸師さんがいました。

「ご自身も被災して、職を失った人です。

な顔をして……。

パテシエさん達は、一見おっかない強面のオッチャンでしたが、その恐い顔をニコニコさせて、子供たちにケーキをあげてました。あったかいです。

自衛隊の人も、私たちの提言を受け入れ



て「自衛隊の乗り物体験」をやってくれました。そのほか「自分に来ることを現地でするために目の前のことを一生懸命やるだけしかないわけです。」

被災地の人も、最初は何かだかわからないけど、現実を受け入れるしかない、生きるために目の前を一生懸命やるだけしかないわけです。

ところが、四月になって「復興、復興」と言われ始めて、色々考え始めた時に「あれっ、私には何にもない」ということに気づくのです。その時に、もう一度、更に深い精神的な傷を負う。それに応えるよう、色々なサポートが必要です。法律家の支援、保健所のサービス、銀行の出張所、郵便局。医療だけでなく沢山の支援が入っています。

最初に仙台に入ったときに、大槌町の両親と連絡がとれないという看護師の女性がいました。十七日に大槌町に入るチームに入れました。そしてお母さんが避難所で

活躍して「大丈夫よ、あたしは。あんた何しに来たの」と言われていました。母親の元気な姿を見て大槌町に何かしたいということ、コーディネーターとして入ってくれて、地元のネットワークを駆使して現地のニーズにあった活動ができるようになってくれました。

自分の生まれた土地は、思い入れが強い。生まれた町に何かしたいという人が多いのです。

チリ大地震の救援医療では、看護職で入りました。災害弱者である一歳未満の乳幼児を持つ家庭の人に診療所での乳幼児検診に参加し、支援物資を配るプログラムでした。

一番強く残ってるのは、家は津波で無くなった女性で、柱だけ残っていた。そこに二人で入って「波が去ったあとに来てみたら、魚が一杯いるのよ。何にも無くなっちゃった。でも、笑うしかないでしょ。泣いて

ても始まらないからね」と泣き笑いしながら言うのです。だから私も「その魚食べたいの」と笑いながら聞いてみた。「食べるわけがないじゃない。腐ってたわよ」って。

半年後にもう一度チリに行って、その人に会ったら、家を綺麗に建て直してました。けど、また海辺の同じ場所に建ててる。「これ、どうなのよ」って私が聞いたら、「私は、ここが大好きだから、ここに一生住むんだ。負けてられるか」と言っていました。前向きに生きようとする人が多かった。

支援スタッフと避難所の人とは、濃厚な関係ができています。気持ち完全に入ってますから。だから、大槌町から帰る日はどちらもつらそうでした。スタッフが泣いて、被災者も泣いて「連れてってー」とかいう子もいました。

でも、同じ日本だし、また会えます。その時は、復興して、ずっといい状態になっていると信じています。